

東郷ふるさとおこし協議会（福井県福井市）

おつくねが原点

それが東郷のまちづくり

東郷ふるさとおこし協議会
会長

後藤 裕幸



1. 福井市の概要

福井市は、福井県の北部に位置し、九頭竜川、足羽川（あすわがわ）、日野川の三大河川流域に広がる福井平野に発展してきました。平成12年に特例市に移行し、平成18年には、隣接する3町村と合併し、人口27万人、面積536.17k㎡となりました。

観光面では、戦国大名・朝倉氏が5代103年間にわたって支配した城下町跡「一乗谷朝倉氏遺跡」があり、当時のままの状態で見守り・保存されています。

この遺跡と庭園は、国の特別史跡、特別名勝、重要文化財の指定を受け、全国でもわずか5つしかない三重指定となっています。また、大河ドラマ「武蔵」のロケ地にもなった一乗滝、厳寒の中、凛とした花を咲かせる越前水仙、東京ドーム10倍もの敷地に咲き誇るコスモス広苑など多様な資源を有しています。

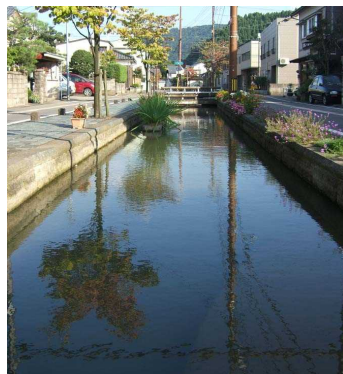
2. 東郷地区の概要

福井市内49地区のうち東郷地区は、市街から約9キロ離れた南東部に位置し、御茸山、楨山（まきやま）や文殊山が連なる山並と足羽川が流れる扇状地に広がる豊かな田園にあり、人口4,100人の静かなふるさとを思わせる16の自治会で構成された地区です。昔、ここ足羽川の伏流水に育てられ、殿様の御前米にも用いられた自慢のお米は今もおいしいと評判で、代表行事「おつくね祭」が名づけられた由来でもあります。「おつくね」とは、方言で「おにぎり」のことです。

また、司馬遼太郎の著「街道をゆく」に「道を折れてほどなく、東郷という美しい在所に入った。集落は道路の両側に軒を並べており、その道路の中央を、幅広い溝川が、走るように流れている。水は浅く、そのまますすって飲めそうなほどに澄んでいた。（以下略）」と記されている

ように、地区の中心を流れる堂田川（どうでんがわ）は、荘園の時代から農地や生活用水に利用されてきました。その両側にある街道は、参勤交代時に北陸街道への近道として人馬が盛んに往来して宿場町として賑わったとされています。

このように地区住民に親しまれてきた堂田川は、平成18年に疎水百選に選ばれました。今もなお清らかな水に鯉が泳ぎ、石畳の敷かれた橋を含め14の橋が架かる光景は、小京都のような安らぎのある風情を漂わせています。



地区の中心を流れる堂田川

さらに、朝倉孝景が西の山城を築いた楨山や、古い神社仏閣、伝統的民家も数多く残っており、堂田川とともに、東郷地区を語る上で欠かせない地域資源となっています。

3. 活動開始の背景・経緯

平成2年の「福井市ふるさと創生事業」で、住みたくなるふるさとづくりと地区の活性化を目指し、住民グループ「東郷ふるさとおこし協議会」を発足しました。専門委員会を設け、住民アンケートやシンポジウムを行い、活動を模索していました。そこへ、平成6年、福井市が「運動会型まちづくり」として、全市民がそれぞれに役割を担い一人ひとりが参加できるまちづくりを推奨しました。その際に、地区住民みんなが集える祭がほしい、との要望が多かつ

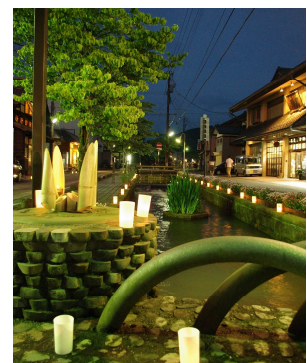
たことから「うららで創るうららの祭」をコンセプトに、翌7年、住民総参加の「第1回おつくね祭」を開催しました。「うら」とは、方言で「私」の意味です。



おつくね祭 俵運びリレー

一粒一粒のお米を握り合わせて作られるおつくねのように、みんなが集まれば大きな目標を達成することができるということから名づけました。16の自治会による手作り御輿パレードや米俵をかつぐ俵運びリレー、おつくねの無料配布など、当日は道路狭しと人で埋め尽くされます。まさに、老いも若きも一体となる地区最大のイベントであり、まちづくりの原点でもあります。

以後、地区の歴史や自然など地域資源を活かした活動を続け、平成17年には、堂田川周辺でせせらぎコンサートを行いました。地元児童の合唱や音楽愛好家による生演奏など世代を超えた交流と心むくコンサートで500人もの観客が集まりました。同時に、道すがら楽しめるように、堂田川周辺に水ろうそくを並べてライトアップし、昼とは違う幻想的な



ライトアップされた堂田川

雰囲気を出しました。

また、堂田川周辺での活動は、まだあります。住民から町家を借り受け、「おつくね茶屋」と「あたらし家」を整備しました。ともに地区の活動拠点や情報発信、憩いの場として活用するもので、平成19年に「おつくね茶屋」を、翌年には、隣に立地する昭和初期の旧商家を「あたらし家」として復元しました。

この「あたらし家」修復にかかる屋根の葺き替えには、80人もの住民が作業し、瓦を一枚一枚屋根から下ろし使用できるかどうかを選別、記念として瓦の裏に名前を書き込み、再び屋根にふきました。



あたらし家修復 屋根の葺き替え

この復元に至るまでには、古民家再生に取り組む業者の協力を得て、格子戸や藁を混ぜた土壁で当時の様子をなるべく再現することや耐震・耐雪について意見を出し合い、まちなみを考慮しながら復元させました。



あたらし家 と前を流れる 堂田川

こうして、「東郷の歴史と自然を最大限に活かしたまちづくり」「住みやすく暮らしやすい、訪れた人々に安らぎと喜びを与える空間づくり」をモットーに、住民主体のまちづくりを行ってきました。

4. 拡がる活動とネットワーク

長年の活動の中では、個々人が様々な分野での専門家と知り合いになったり多方面からまちづくり情報を仕入れたりとアンテナも高くなっています。また、視野が広がると新

しい意見を聞きたくなり、やりたいこともどんどん膨らみます。

そこで平成18年、景観を学ぶ学生とまち歩きや意見交換会を、平成20年には、フリーペーパーを編集する学生とマップ作成を行い、若者ならではのアイデアを盛り込んだ明るいマップに仕上がりました。

さらに平成21年には、豊かな自然環境を活かし、自然体験活動を専門とするNPOと協働し、小学生の民泊受入や地区名所の散策、川遊びなどを行い、当協議会も役割分担し一丸となって取り組みました。



民泊での農業体験

このように、学生やNPOとの協働事業は、各団体の特色や専門性を地区のまちづくりに活かすことができ、大いに参考になりました。

また、CONE（自然体験活動に取り組む諸団体の全国協議会）の第10回全国フォーラムが当地区で行われることに決まり、CONE福井が母体となった実行委員会に当協議会も加わりました。そして、独自でも会議を重ね、東郷を満喫していただけるような「おもてなし」について話し合いました。当日は、全国からの参加者におろし餅やきなこ餅、昆布巻にこんにやくのから揚げなど東郷ならではの「おもてなし料理」を作り、大変喜んでいただき気持ちよく過ごしていただけたことをアンケート回答で知り、うれしく思いました。東郷を体験してもらい人柄を感じ取ってもらえたとともに、私たちも「自然体験活動は、地域おこしである」ことを再認識することができ、多くの満足と感動を味わうことができました。

この時に挑戦した生キャラメル作りは、地元乳牛の絞ったてミルクを使ったもので大変好評だったため、その後も文化祭などで販売しています。また、地元のお酒を使った地酒

入りまんじゅうも特産品として販売し、ほのかなお酒の風味が好評です。



地酒入りまんじゅう

5. 活動の成果

活動の原点は、やはり平成7年の「おつくね祭」。住民総参加のおつくね祭で培われた連帯感と人の輪がまちづくりに活かされ、東郷の魅力となっています。様々な活動を通して感動をともにすることがまちづくりでの底力となり、世代間の交流や人材の発掘及び育成といった大きな成果につながっていると思います。

また、地区の歴史や自然、堂田川を活かした活動を多方面から行っていることが地区内外にPRされることで、その反響を肌で感じ、自分たちの住む地区に、より一層の誇りや愛着を持つことができました。

6. 課題と展望

当協議会のまちづくりは、発足20年を経てようやく、おつくね祭や堂田川のライトアップが定着してきました。また、町家の修復や東郷マップもできたばかりです。

活動が多方面にわたるため、課題も多く、一部のメンバーの負担になったり、資金面で壁にぶつかったりしています。また、どの活動に重点を置くかということについても議論を重ねています。

今後は、東郷の豊かな自然環境を活かした子どもの受入や民泊をレベルアップさせるために、専門的に行うNPOなどの研修を受け、活動内容を充実させていきたいと思っています。好評の「おもてなし料理」も食材やメニューの研究を進め、販売所を常設したいと思っています。

他にも、近隣の一乗地区と連携し、両地区にまたがる散策路のガイドマップ作成や案内板の調査・設置など、取り組みたいことはたくさんありますが、たくさんの楽しい仲間と共に実現させていきたいと思っています。